

絵本に描かれる死の表現 — 幼児向け絵本の内容分析から —

How Death is Depicted in Picture Books
: Content Analysis of Picture Books for Young Children

松田 光恵¹・井藁 美咲²
Mitsue MATSUDA・Misaki IWARA

Abstract

The purpose of this study is to clarify how death is portrayed in picture books for young children. From the 86 picture books that "come face to face with death" surveyed in this study, the author selected for analysis six books for ages 3-5 that depict situations after the death of a grandfather or grandmother. The results revealed the following: (1) Since picture books play an important role in childcare activities, the depiction of death in these books helps reduce fear and anxiety about death by allowing children to imagine themselves within the situation in the book and promoting an understanding of death, which leads to the development of views on life and death in early childhood; (2) although young children may struggle with understanding death, these picture books depict children finding psychological support which allows them to reduce their grief and accept it in the end through a gradual process. Children can learn that death is a part of nature through picture books; (3) considering that many Japanese picture books indirectly and euphemistically express death and that many young children believe in the idea of reincarnation, an increase in the number of these works may allow children to think about life and death through the depiction of specific events and foster more accurate views of life and death among young children.

Keywords : picture books, young children, views of life and death, life and death education

I 問題

1. 死生観について

死生観とは、広辞苑（新村編，2018）によると「死と生についての考え方。生き方・死に方についての考え方」とされている。島藁（2009）は、死生観という言葉は明治時代に作られ、もっとも流行したのは第二次世界大戦中である、と考察している。その理由として、大戦で家族や友人を亡くした世界中の人が、改めて命の尊さを感じ、これからの未来について考えるようになったからではないかと指摘している。死とは誰にでも共通に訪れる必然であり、逃れられない人生の重要なテーマである。現代では、死と生と性に関する事柄を扱うデス・エデュケーション（Death Education）に注目が集まっている（鈴木，2022）。デス・エデュケーションとは死生観の形成を目指す教育である。経済的には発展し豊かな社会だが、その一方で自殺、孤独死、高齢化社会など不安定な要素も多く存在し、我々の社会は常に死の脅威にさらされている。死とどのように向き合うのか、家庭、学校、地域で学び、改めて死についてひとり一人が再認識する必要がある。

死生観について駒井（2005）は、死についての一般的な概念構成の要素を、①死は生態的機能を失うことという理解、②死の不可逆性、死んだ人間は蘇らないという理解、③死は全ての生命に共通で

1 くらしき作陽大学子ども教育学部

2 社会福祉法人カナン福祉センター幼保連携型カナン十川こども園

あること、④死の原因の理解、⑤死は自らにも必ずおとずれるものだという理解、の5点とした。またこの他にも 死の現実性、物理的に死体はどこに行くのか、肉体活動の停止、精神活動の停止、死体の表面的な形状、有機物と無機物の相違などの理解も死の概念を構成するために必要な要素と指摘している。

我々は人生の中で、幾度となく何かを失う体験をするが、死によってあるいは生き別れによって愛情や依存の対象を失う体験は、対象喪失 (object loss) と呼ばれている。小此木 (1997) によると、対象喪失とは広い意味でのストレス因となりうる。例えば①近親者の死や失恋をはじめとする愛情・依存の対象の喪失、②住み慣れた環境や地位、役割、故郷などの別れ、③自己を失う体験、理想やグループを失う場合にも、深刻な対象喪失の体験が起こると考察している。

小此木 (1981) は、喪失後に生じる心の営みを、喪の仕事 (mourning work) とした。この喪の仕事の心的過程、人間が死を受容していく過程として、E・キューブラー・ロス (1981, 川口訳) によると、①否認、②怒り、③取り引き、④抑うつ、⑤受容の5段階に分けられる。死を受容する段階を辿る経過や時間は個人差があり一人一人異なる。特に大切な人との死別あるいは離別した際、思う存分悲しみ、故人について思うことが大切であろう。西川 (2022) は、重大な喪失後の積極的な関わり、死や生、故人について話し合うことで、死別から立ち直ることができることを示唆している。

また、ハーヴェイ J.H. (2003, 和田・増田訳) は、重大な喪失は喪失対象との物理的関係が終結しても心理的関係はなおも継続し、残された人々の日常の思考や行動面において影響を及ぼし続けると考察している。このことから、物理的な喪失イコール関係の終結、とはならないことがわかる。

そして、喪失対象を具現化し、関係を継続するために非常に重要な役割を果たすものの一つが、遺品や思い出の品、形見だと考えられる (池内, 2006)。池内 (2006) は、形見の機能について主に情緒的な安心を与えてくれる「情緒的機能」と、他者との結びつきの証となる「関係性の象徴的機能」があり、特に後者の機能が典型的としている。形見には喪失後の回復過程に応じて喪失対象の身代わり、喪失対象との関係維持の象徴、悲嘆を軽減してくれる心の拠り所、喪失対象が確かに存在していたという証、喪失対象の一部などの意味付けがなされている、と解釈している。しかし、その反面、奇跡への希望を抱いている人には逆効果であり、回復をより困難にするといった負の働きを併せ持つことも示唆している。特に突然の事故で亡くしてしまった人には、「移行対象」概念を用いることによって説明ができる。移行対象とは、「乳幼児が特別の愛着を寄せる自分ではない最初の所有物」と定義され、乳幼児に限らず成人においても大切な人の喪失時には、形見が移行対象として役目を果たし、精神的な支えになっていると考えられる (池内, 2017)。このことから、形見や遺品は、残された人がこれから前向きに生きていくための心の拠り所となる一方で、突然死などで心の整理がつかない状況下で残された人を苦しめる存在にもなると考えられる。

2. 子どもの死生観

子どもは死を、いつ、どのように理解するのだろうか。細谷 (2015) によると、3～13歳頃の子どもの死の概念に関する研究は1930年代から行われ、1970年から1980年代に盛んになったという。子どもの死の概念は、①「すべての機能が停止すること」(無機能性)、②「元には戻らないこと」(不可逆性)、③「誰にでも必ず起こること」(普遍性)、④「その死に関して必ず原因がある」(因果性)の4つに分類され、その4分類を完全に理解することで死の概念の確立であるとしている。

緒方・西田 (2017) は、子どもの死の概念は認知発達段階に沿って発達すると論じているが、志田・渡邊 (2009) の調査によると、幼児期は、死の普遍性や体の機能の停止について、半数以上がわからないと答え、死んでもまた生き返ると捉えており、死の不可逆性について、7割の児童が理解できていないことを明らかにしている。

子どもの年齢による死の理解の段階について、仲村 (1994) は、第1段階 (3～5歳) では生と死が未分化であり、死の意味がまだ分かっておらず、自分や自分のまわりの人間などは死なないと思っており、死んでも生き返ると考えている子どももいる。第2段階 (6～8歳) になるとほぼ人間はい

つか死ぬ存在であるという「死の普遍性」を理解していく。「体の機能停止」や「非可逆性」についてもわかるようになり、ほぼ死の現実的意味理解している。第3段階（9～11歳）になると、普遍性については全ての子どもが「誰でも死ぬ」と理解できるようになる。しかし、「体の機能停止」「非可逆性」の理解を示しつつも、生まれ変わるという思想が増えている。第4段階（12～13歳）になると生まれ変わり思想が顕著になり、霊や天国といった霊的精神的考えが見られることを確認している。このことから、子どもの死の捉え方は発達段階により違っており、個人差はありつつも、死の普遍性と絶対性を受け入れるようになるのは10歳前後になる。子どもの死の概念、特に幼児期の死の概念は大人のそれとは違う。死と言う言葉は発達の中でその意味を獲得し理解するが、幼児期においては、死は自らにも必ずおとずれるものとの理解が備わっていない。本研究で焦点としている幼児期の子どもにとっての死とは、大人の死の意味とは違ったものとして理解している。生と死は未分化であり、現実と非現実の死の区別がないのが幼児期の死の捉え方である（仲村，1994）。

このように幼児期の死生観とは未発達であるが、植田・山本（2002）は、死生観確立の萌芽は既に幼児期に始まっており、就学前に絵本によって命の大切さを感じることの重要性を示唆している。日々情緒や心の働きが目まぐるしく発達している幼児期に、死が描かれた絵本と出会うことはその後の死生観に大きな影響を与えるだろう。

Ⅱ 目的

幼児期の死生観はどのように育まれるのだろうか。また、尾上・中根（2009）は近年の幼児の死の概念発達に関する研究では絵本が用いられることが多いとしている。このことから本研究では幼児向けの絵本において死生観がどのように描かれているかを検証する。まず、保育の基本的な考え方など保育の実施に関わる事項を定めた「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針解説」で絵本がどのような位置づけにあるのか、そして子どもにとっての絵本との関わりを述べる。

1. 保育における絵本の位置づけ

保育所保育指針（厚生労働省，2017）にある、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の言葉による伝え合いでは、「保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむ」と絵本と物語についての記載がある。

また、幼稚園教育要領（文部科学省，2018）の領域「言葉」においては「ねらい」「内容」「内容の取扱い」のいずれにも絵本や物語が言及されている。「ねらい」(3)には「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」、「内容」(9)には「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」とある。また、「内容の取扱い」(3)「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」および(4)「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること」とある。その際、「本や物語に親しんだり、言葉選びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」と働きかけが示されていることから、絵本や物語が保育実践において欠かせないものであることがわかる。

さらに、保育所保育指針解説（厚生労働省，2018）によると、領域「表現」にも絵本や物語との関わりが示されている。保育所保育指針解説領域「表現」ねらい「①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。」「②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」「③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」では、子どもの表現する活動の1つとして音楽を聴く、つくる、歌う、音楽や言葉などに合わせて体を動かす、何かになったつもりになることとともに「絵本をみる」ことがあげられている。そして、保育所保育指針解説領域「表現」内容の取扱いでは「①

豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の子どもや保育士等と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」では、子どもが興味や関心を抱き、主体的に関われるような環境の例として、絵本や物語など、絵本が文化財として示されている。このことから、絵本は子どもにとって重要な文化財であり教科書であるということがわかる。このように、保育・教育の中で、子どもたちは絵本や物語にふれることによって、言葉による文化を理解し親しめるようになる。

また金（2020）は、子どもと絵本との出会いの場は、家庭での出会いのみならず、保育・教育の場、すなわち集団の場においても、子どもたちは絵本に出会うと指摘している。そのため、幼稚園・保育園・こども園に通っている子どもたちにとっても絵本はとても身近な存在であることが分かる。

そして、保育・教育機関で積極的に行われている活動の一つが絵本の読み聞かせである。秀（2018）は、保育現場での絵本の読み聞かせの活用状況を①主活動の導入、②昼食前の時間、③お昼寝前のお楽しみ、④おやつ準備を待つ間、⑤おかえりの会の前のお楽しみ、⑥延長保育時の待っている時間の6場面に分けている。保育現場における絵本の役割は、子ども達が苦痛と感じる「活動を待つ」という時間を楽しく過ごし、「行動に遅れが生じる子ども達」に対して自身の行動を促す後押しにもなっている。

絵本は、子どもの感性の基盤を作るための大切な教材の一つでもある。幼稚園教育要領（文部科学省，2018）が示す通り、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりする」経験をすることで、子どもの想像力や感性は豊かになっていくことが考えられる。

2. 絵本と子ども

正置（2013）によると日本は世界の中でも、有数の絵本文化を誇る国である。絵本の出版は質量とともに優れ、また多言語からの翻訳絵本によって異文化の紹介も行われている。日本の子ども向け書籍の出版状況を見ると、子ども向け書籍の出版点数が一番多かったのは2006年で4,380点が刊行されており、絵本はそのうちの1,847点であった。昨今は読書離れが進み、出版業界は売れ行きが低迷し、絵本も出版点数が減少しているが、正置（2013）は乳幼児のための絵本が子どもの出版界を支えている、としている。

絵本の定義について、松居（1973）は「物語を聞くために必要な、目に見えない世界を心の中に見えるようにする力が十分に発達していない子どもは、絵を手がかりにして心の中に世界を描いてゆく。また、文字を知らない子どもは言葉を読むのではなく絵を読んでいく。こうした特性から、子どもにとって絵本の挿絵は、きわめて重要なものと考えられるのである。」としている。また、絵本では物語を語る力をもった絵が大切であり、そのためには「絵と絵のつながり」と「イメージの発展による物語の展開」が必要だとし、対象を丁寧に、なおかつ無駄なく描いた絵本が良く、色づかいについては、色を見ただけで楽しい気分になれることが、絵本に求められる条件だとしている。さらに文章と絵は別々に存在するのではなく、物語と絵の調和も必要な要素である。これらのことから、絵本の魅力とは文章などの言語だけでなく、挿絵が極めて大きな存在であることが分かる。特に言葉の未発達の幼児は、挿絵から物語の風景を思い描くことによって、想像などの思考を活性化している。

そして本稿で取り上げる死＝死生観について描かれている絵本については、植田ら（2022）が詳しい。植田ら（2022）によると、子ども向け図書に死や残酷な描写が少ない理由は、①近代日本の政策的教育、②日本人の国民性、と論じている。その中で①の近代日本の政策的教育については、日本の絵本や子ども向け図書の普及は明治時代から本格化した。グリン童話に代表される海外児童文学を道徳的教材にする力が働き、かなり自由に改変されてきた歴史があるとしている。教育的に有害なものや悪徳で不適切なものは洗練された美しい言葉に置き換えられ、性的な描写の削除や話を簡略化してきたという歴史がある。近年になってもその傾向は大きく変わらず、死ぬという言葉避けて言い換えることや、明治時代から続く日本語翻訳の過剰なまでの原文の書き換えが習慣になっているので

はないか、としている。また②の日本人の国民性については、寿命の延伸と在宅死の減少、醜く恐ろしい死から目を逸らし、特に子どもには死を隠蔽し遠ざけ、真正面から向き合っていない。また国民性として、物事を継続的にねばりづよく熟考する習慣がないとの理由を挙げている。

ところが、1990年代以降「死」を取り上げる絵本の出版数が増加した。この要因として植田ら(2022)は①バブル崩壊以降の自殺者の増加②「子どもの自殺」や「子どもによる殺人」の表出と社会問題化、の2点を挙げている。このことを受け、「こころの教育」あるいは「いのちの教育」の必要性和徹底が叫ばれたが、不十分なのが現状である。このような背景から、命や死をテーマにした授業や教材や書籍の需要につながり、おのずとそれらが日本人に受容されていった。死を直視しない国民性やこれら社会的背景は、子どもが読む絵本にも何等かの影響を及ぼしてきたと考えられる。

絵本が子どもに与える影響は決して小さくない。上述の通り子どもが死に対する情緒の芽は無意識ながらも早い時期に形成されている。しかし、特に絵本と触れ合う最初の時期である第1段階3～5歳児では、生と死が未分化であり、死の意味がまだ分かっておらず、自分や自分のまわりの人間などは死なないと思っている。また、死んでも生き返れると考えている子どももいる。これらのことから、水野(2010)は、命に対して不適切な認識を形成する前の幼児期に、予防的な効果をねらって命の教育を実地することが効果的であるとしている。

従って本研究の目的は、幼児向け絵本における死の描かれ方を明らかにすることである。幼児にとって絵本とは、言葉や心の発達を促す最適の教科書であり、保育現場でも積極的に活用されている。また、死に対する認識が未発達な幼児に対して、絵本がどのような死生観を表現しているのかを調べることは意義深い。そのため、「死と向き合う絵本」に焦点を当て、子どもへどのような影響を及ぼすのかを検討する。

Ⅲ 方法

1. 調査手続き

本研究では絵本の内容分析を中心に調査を行った。調査対象として、ウェブサイト「絵本ナビ^{註1}」を使用し、その中から幼児向けの絵本を選出した。絵本ナビは絵本の試し読みができる絵本・児童書情報サイトとして設立された。このサイトの選定理由として、①年間利用者数は約2,000万人であり、社会的に広く認知されていること、②サイト内の紹介作品数は約8.9万本(2022年1月時点)であり、十分な蔵書を有していること、以上2点から統計的に分析対象として妥当と考えられる。これらの理由から絵本ナビが掲載しているカテゴリー「死と向き合う絵本」86冊を調査対象とした。一番古い絵本は1977年発行の「100万回生きたねこ」(佐野, 1977)で、最新のものは2023年発行の「チリンのすず」(やなせ, 2023)であった。

2. 絵本の内容分析

絵本の内容分析を行うにあたり、①絵本の主人公、②絵本の対象年齢、③絵本の対象年齢と主人公、④死の表現、の4点で基礎的分析を行った。①の絵本の主人公は、幼児にとって身近な「人間」でありかつ「祖父母」がテーマの絵本を選出した。②の絵本の対象年齢については幼児期である3～5歳児を対象とした絵本を選出した。③の絵本の対象年齢と主人公は、言葉の響きを楽しむ絵本が好ましいと3歳児と、魅力的なストーリーの絵本が好ましいとされている5歳児を比較対象とし、かつ人間と動物を主人公の絵本に分類した。④の死の表現では、主人公の死の前・死んだ時・死後、の3つの時間軸に分け分類した。

Ⅳ 結果

1. 基礎分析の結果

①絵本の主人公について

絵本の主人公についての結果を示す。絵本ナビのサイト内に掲載されている本のタイトルと表紙か

ら主人公を、人間・動物・その他の項目で分類を行った。死と向き合う絵本対象86冊のうち、人間が主人公の絵本は41冊、動物は36冊、その他は9冊であった。

まず主人公が人間の絵本は、祖父母との別れをテーマにした絵本が18冊、両親や兄妹を亡くす絵本が14冊、知人が亡くなるなどその他が9冊であった。実生活のなかでも、両親や兄妹の死より、祖父母との別れの方が早く訪れるため祖父母をテーマとした絵本が多いのではないかと考えられる。次に、主人公が動物の絵本は、ペットとして飼われやすい猫や犬だけでなく、幼児にとって親しみのあるライオンやゾウなどのものであった。その他は、船や木・川を使って「死」を表現している絵本である。例えば、「いのちのふね」(鈴木, 2011)では遠くへ旅立ってしまった大切な人は、命の船に乗って、雲の上にいき、楽しく過ごす。そして、どんどん元気になって、どんどん若くなり、赤ちゃんになって、雲の上からまた旅立つというように表現されている。これは、子どもが自由に想像を膨らませられるよう、あえて船や木・川に例えていると考えられる。

②絵本の対象年齢

絵本の対象年齢についての結果を示す。絵本ナビがサイト内で表示している対象年齢や、同じく絵本紹介サイト「ピクトブック^{註2}」が表示している絵本の対象年齢から3歳以上、4歳以上、5歳以上、小学生、不明、の項目で分類した。

まず86冊のうち、3歳以上が対象年齢の絵本は26冊であった。4歳以上が対象の絵本は8冊であった。5歳以上が対象年齢の絵本は17冊であった。また小学生を対象とした絵本は16冊であった。不明なのは、対象年齢を記載していない絵本19冊であった。幼児向けの死と向き合う絵本としては、3歳からでも読めるものが最も数が多い。また対象年齢を記載していない理由は、年齢が関係なく読め、読む年齢によって絵本読後の感想が変化する内容と推測された。

③絵本の対象年齢と主人公

絵本の対象年齢と主人公についての結果を示す。対象年齢3歳以上で主人公が人間の絵本、動物の絵本、対象年齢5歳以上で主人公が人間の絵本、動物の絵本の4つに分類した。3歳児は言葉の響きを楽しむ絵本が好まれているが、5歳は魅力的なストーリーに出会う絵本が好ましいとされている。そのため、言葉を楽しむ3歳児と、物語を楽しむ5歳児を比較対象として分類を行った。

3歳以上で人間の絵本は16冊、3歳以上で動物の絵本は17冊、5歳以上で人間の絵本は8冊、5歳以上で動物の絵本は5冊であった。人間と動物を主人公とした絵本を対象年齢別にみると、3歳以上で動物の絵本が一番多く、5歳以上で動物の絵本が一番少ないことが分かった。しかし3歳児向け絵本の人間と動物の差はほとんどなく、どちらにも同程度であった。3歳児にとって動物であれ、人間であれ、絵本を読むことでその内容に親しみが持てることを目的としていると考えられる。一方で5歳児対象の絵本は、人間が主人公の絵本が多い。これは、3歳児と違い、5歳児は人間の死への理解が深まっており、内容の理解ができるからではないだろうか。

④死の表現

幼児向けの絵本の中でどのように死が扱われているか、死の表現についての結果を示す。祖父母との別れをテーマにした絵本18冊(上述①絵本の主人公)を分析対象とした。絵本の内容から死の描かれ方は、主人公が死ぬ前の話、死んだ時点の話、死んだ後の話、と3つの時間軸に大別されると判断したため、主人公が死ぬ前・死んだ時・死後、の3つに分類した。

分析対象18冊のうち、主人公が死ぬ前(祖父母が亡くなる前)が5冊、主人公が死んだ時(祖父母が亡くなった時)が2冊、主人公の死後(祖父母が亡くなった後)が11冊であり、死後を描いた絵本が一番多い結果となった。大切な人や家族が死んだあと、残された者には大きな喪失感が生まれる。絵本のストーリーと自分を重ね合わせ共感しやすい、といった理由から死後を描いた絵本が多いのではないかと考えられる。そのため、今回の分析では、主人公の死後(祖父母が亡くなった後)を描いた絵本に焦点をあてた。対象11冊のうち、絵本対象年齢6歳以上の5冊を除き、3～5歳児向け6冊を内容分析の対象とした。

2. 絵本の内容分析結果

上述のように、主人公（祖父母との別れがテーマ）の死後を描いた絵本11冊のうち、3～5歳児向け絵本は6冊だった。しかしその中の「よあけまで」（曹，2002）は3～5歳以上対象とあるものの、本研究の対象である3～5歳の幼児には文字数の多さや内容の難しさから分析対象として適切ではないと判断したため外し、対象年齢3～5歳児向け5冊を本研究の分析対象とした。この5冊について①子どもが死を理解でき、死に対して肯定的に捉えるきっかけとなった描写、②保育所保育指針5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）内容との関連、③絵本の色味やページ数、④祖父母が亡くなったと分かる描写、に焦点を当て分析した。なお各絵本の内容については、絵本ナビウェブページ記載の「出版社からの紹介」（絵本ナビ，最終取得日2024年10月10日）を引用する。

2.1 「おじいちゃんわすれないよ」（ベッテ，2002）洋書 3～5歳以上

〈出版社からの紹介〉「大好きなおじいちゃんの死に直面した少年の、揺れる心情を描いたオランダの絵本。おじいちゃんはヨーストとの約束を忘れないように、いつもハンカチに結び目を作っていた。おじいちゃんが死に、ヨーストもまた結び目を作る。おじいちゃんを忘れないために。」

①ヨーストとの約束を忘れないようにおじいちゃんが結び目をつけていた赤いハンカチに、今度は自分が結び目をつけることでおじいちゃんの死を受け入れることができた。主人公にとって赤いハンカチが、おじいちゃんからの形見になったことがわかる。

②「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを楽しむ」のように自分なりに折り合いをつけ、おじいちゃんの死から感じたことや考えたことを赤いハンカチに結び目をつけて表現することで、おじいちゃんの死を受けとめようとしていることがわかる。これは「保育所保育指針における表現のねらいの2」と関連する。

③赤いハンカチが映えるように、全体的に寒色系の色を使って描いている。特に表紙は、ページジュブライウンのような色味で少し無機質に感じる。また人物を細い線で描くことで、おじいちゃんがいなくなった虚しさが表現されている。全28ページで、対象年齢である3歳児も飽きずに読むことができる。しかし、文章が多く、絵の色味も寒色系が多いため、低年齢児の場合、最後まで集中することが難しいと考えられる。

④おかあさんが「おそうしきにいこう」とヨーストに伝え、「おじいちゃんがいっているひつぎをみつめた」との記述からおじいちゃんが亡くなったことが分かるが、「おじいちゃんが亡くなった」という言葉はなく死は直接的に表現されていない。

2.2 「おじいちゃんのごらくごらく」（西本，2006）和書 5歳以上

〈出版社からの紹介〉「おじいちゃんと孫ゆうたの絆を描き出したお話である。この絵本のキーワードは「ごらく（極楽）」。おじいちゃんとの楽しい時間、やがて訪れる死。二つのまったく異なる場面を、このキーワードが結びつける。登場人物の心情が切々と伝わってくる文章、表情豊かな絵。心揺さぶる一冊である。」

①おじいちゃんが「ごらくごらく」とつぶやくことで、幸せな気持ちになれることをゆうたは知った。おじいちゃんが亡くなったのち「ごらくごらく」という言葉がおじいちゃんからの形見になったことがわかる。

②「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを楽しむ」のようにおじいちゃんが呟く「ごらくごらく」という言葉に親しみをもち、おじいちゃんが亡くなったことによりその言葉の意味や、美しさに気づくことができる。これは「保育所保育指針における表現のねらいの2」と関連する。

③全体的に温かみのある色味のため、子どもにも馴染みがある色使いである。オレンジやブラウンなどの暖色を使っている。人物には黒い縁どりがなされていないため、より温かみがましている。また、ページ数は32ページと適度な量のため、子どもは飽きずに集中して読むことができる。

④「ほとけさまのくにへいってしまった」との記述からおじいちゃんが亡くなったということが分かるが、「おじいちゃんが亡くなった」という言葉はなく死は直接的に表現されていない。

2.3 「いつもだれかが…」(ユッタ, 2002) 洋書 5歳以上

〈出版社からの紹介〉「いつもだれかが、そばにいた。あぶないときにはたすけてくれた…。幸運だった一生をふり返る祖父と耳を傾ける孫、二人を「見守る存在」を描き、子どもから大人まで、しみじみと心が癒される作品。」

①おじいちゃんが亡くなったことをきっかけに、天使が孫についてくる描写がある。言葉として記述されていないが、天使がおじいちゃんであり、おじいちゃんがぼくを見守っているということを表しているのではないかと考えられる。天使は日本より海外において親しみ深いモチーフであり、死を表現する際に婉曲的かつ効果的に表現している。

②「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」に合致すると考えられる。天使は実際には目には見えない存在であるが、おじいちゃんの信念により存在するもの、と孫は教えられていた。天使がいたことにより、おじいちゃんは困難にも耐え、幸せな出来事にも出会えた。この思い出を聞いたことにより、孫が天使を信じる理由が表現されていた。これは「保育所保育指針における表現のねらい3」と関連する。

③ダークな色味を使い描かれている。ページ数は40ページと長いですが、絵を基調としているため、文字の分量は少ない。そのため子どもは絵に惹かれ、読みやすいのではないかと考えられる。また、天使というファンタジー要素も含まれているため、子どもも親しみをもって読めるのではないかと考えられる。

④おじいちゃんが亡くなったという直接的な表現はない。「おじいちゃんはずかされたのか、目をとじた。ぼくはそっとへやをでた。」という記述と、おじいちゃんについていた天使が自分についてくる描写からおじいちゃんが亡くなったことが表現されている。

2.4 「おじいちゃん」(梅田ほか, 2017) 和書 5歳以上

〈出版社からの紹介〉「おじいちゃんが死んだ。おじいちゃんの部屋はそのままなのに、おじいちゃんはもういない。おじいちゃんの不在を認めることがなかなかできない子ども(孫)が、おじいちゃんとの思い出をめぐりながら、「死」を受け入れていく姿を描く。」

①千年イチョウが一度にどっと舞い落ちたとき、おじいちゃんが会いに来て、「いつも見守っている」と伝えに来たように感じたことで、孫はおじいちゃんの死を受け入れることができた。生前おじいちゃんが「あきのおわり、このイチョウがいちどにどっとまいおちるとき、あいたいひとにあえるって」と話していたことから、孫はイチョウの葉がおじいちゃんだと認識することができた。

②「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」のようにぼくはおじいちゃんとの散歩の中で千年イチョウの森を訪れ、おじいちゃんからの昔話をきいたことにより、「イチョウの葉が舞い落ちたらどうなるんだろう」と自分の中でイメージをしていたのだろう。それゆえ実際に葉が舞い落ちた際、おじいちゃん存在を意識したのではないかと考えられる。これは「保育所保育指針における表現の内容2」と関連する。

③ページ数は32ページであり、たくさんの色が使われており、子どもが絵や文章だけでなく、色味でも楽しく面白いと思える絵本になっている。また、最初は青色などの寒色を基調とした背景が多いが、場面が変わるとともに明るい背景に変わっている。これは、おじいちゃんを亡くした直後はその事実を受けとめられなかった孫が、イチョウの葉が舞っている様子を見ておじいちゃんの死を前向きに捉えられるようになった自身の心情とリンクしているのではないかと考えられる。

④「おじいちゃんのへやはそのままなのに、おじいちゃんもういない…」やおかあさんが「そんなじゃ、そらにいるおじいちゃんがしんばいするわよ」との記述からおじいちゃんが亡くなったことがわかる。「おじいちゃんが亡くなった」という言葉はなく死は直接的に表現されていない。

2.5 「ぼくのおおじいじ」(スティバンヌ, 2013) 洋書 3～4歳

〈出版社からの紹介〉「おおじいじが死んでしまった。死んだ後もそばにいて約束したよね。おおじいじ、どこにいるの？喪失感とどう向き合うか。絵本という形で子どもに死を上手に伝えている。」

①孫が庭の草の上に座りおならを吹いた後、雷が鳴り大雨が降ったことで生前おおじいじが言っていた「おならを吹いたら雷が鳴る」という言葉を信じることができた。このことから、おおじいじが空から見守ってくれていると前向きにとらえることができた。

②「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」のように、孫はおおじいじが生きていた時、一緒に色々な場所に行ったり遊んだりし、様々な体験をしたことで感性が豊かになっていたのではないだろうか。だからこそ雷がなった際「おおじいじがきた」と思えたのではないか。これは「保育所保育指針における言葉の内容8」と関連する。

③ページ数は24ページで背景は全ページ白地である。はっきりとした色味を使っており、イラストがアニメ調のため、3歳児は親しみが沸く。文字数も少ないため、子どもは飽きずに読めると考えられる。

④「おおじいじがねむっているあいだにしんじゅったって。」との記述から、おおじいじが亡くなったことが分かる。「しんでしまった」と死を直接的に表現をしている。

V 考察

以下、考察として3点にまとめる。

①死生観を描く絵本と保育との関連

本研究では保育所保育指針と絵本に描かれる死生観との関連を調べた。絵本における死生観は主に「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを楽しむ」、「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」、「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」、「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」などと関連していた。絵本を通して子どもの五感を豊かにし、情緒を育む、あるいは遊びを展開するためにも、絵本は保育活動の中で重要な位置づけにある。また前述に示したように3歳児には死というものが人生の最後を意味することは理解できない。そのため、人間ではなく動物を使った死の表現によって、より内容がわかりやすく親しみが感じられるような表現が多く見られた。5歳以上の対象になると、人間はいつか死ぬ存在であるという死の普遍性をほぼ理解していくため、人間や物語を中心とした絵本が増えているのではないか。保育実践で用いられる絵本を通して、その中に死を描くことにより、具体的に死をイメージすることが可能となり、徐々にではあるが幼児期の死生観が形成されると考えられる。

②幼児の死の捉え方

祖父母の死後を描いた絵本の比較から、5冊全てにおいて最初は祖父母の死を理解することができず、「まだどこかにいるかもしれない」と祖父母を探しにいたり、死を否定し葬式に参加できなかったりする描写があった。このことから子どもが死を理解することは困難だということがわかる。

しかし、5冊ともある出来事をきっかけに祖父母の死を前向きにとらえている描写がある。それは、祖父母との思い出である。例えば祖父母との思い出の地に行き、思いを巡らせたことをきっかけに主人公が死を理解し、前向きに生きていく描写がそれにあたる。物質的なものに限らず、祖父母との思い出が形見や遺品となり、残された人が前向きに生きていくための心のよりどころとなることが分かる。池内(2006)は形見の機能について「喪失対象の身代わり」、「喪失対象との関係維持の象徴」、「悲嘆を軽減させる心の拠り所」、「喪失対象が確かに存在していたという証」、「喪失対象の一部」などの意味が付与されるとしている。絵本でこのような形見や遺品に相当するような描写があることで、亡くなっても祖父母が近くで見守ってくれる、と悲しみの軽減につながるのではないか。

また今回の分析対象外の絵本の中でも、祖父母が生まれ変わって見守ってくれる描写の絵本が多数あった。和書「おじいちゃん」(梅田ほか, 2017)ではイチヨウの木、洋書「ぼくのおおじいじ」(ス

ティバンヌ, 2013) では雷、洋書「おじいちゃんのねがいごと」(パトリシア, 2021) では鳥、洋書「おばあちゃんがいなくなっても…」(ルーシー, 2010) ではたんぽぽに生まれ変わって主人公のもとに現れる描写であった。このことは死者がその死後においても人々の心の中で生き続けることができる、という示唆を与える。水野(2010)は、洋書は死後においてもその対象が人々の心の中で生き続けることを示す作品が多いと指摘しており、本研究の結果と合致した。このように絵本では、死に直面した子どもが段階的に死を受け入れていく描写が描かれており、死とは恐れ忌み嫌うものではなく、自然の営みの一つと、絵本を通じて学ぶ事ができる。

③絵本における死の表現

祖父母が亡くなったと分かる描写に焦点を当てた考察を示す。和書「おじいちゃんのごくらくごくらく」(西本, 2006)では「ほとけさまのくにへいってしまった」、和書「おじいちゃん」(梅田ほか, 2017)では「そんなじゃ、そらにいるおじいちゃんがしんばいするわよ」という記述がそれにあたるが、いずれも直接的な表現ではない。洋書「いつもだれかが…」(ユッタ・パウアー, 2002)では、孫自身に天使が付いている挿絵から祖父が亡くなったことは分かるが、婉曲的な表現のため子どもにとっては死が分かりづらい。洋書「おじいちゃんわすれないよ」(ベッテ, 2002)では、「葬式」という言葉から、人間の死を理解できる年齢であればその意味は分かるが、今回の研究対象である3～5歳児の幼児には理解が難しい。唯一「死んでしまった」と直接的に記述されていたのが洋書「ぼくのおおじいじ」(ステイバンヌ, 2013)であった。水野(2010)は、和書よりも洋書において葬儀や墓を具体的に描いている作品や死の直接的な表現が多いとしている。本研究でも同様に、和書は死を直接表現しない傾向が示された。近年では幼児期にテレビやゲームから死にまつわる歪んだ情報を取り入れることが問題視されているが、絵本を通して死を直接的な表現で示し、命について考える作品を増やすことで、幼児が具体的なイメージを持ち正しい死生観を育てることができるだろう。

今回は幼児を対象とした「死と向き合う絵本」86冊中5冊を選出し、分析した。これら絵本は幼児にとっての死の対象が祖父母にあたるものであったが、大人が読むと自分の両親と重ねたり、自分の子どもと祖父母の関係に置き換えたりして読むことができる。どの年齢で読むかによって心情の変化や絵本の受け止め方も変わるが、いずれにせよ幼児期の子どもにとっての絵本とは、心の豊さの基盤となり能力の発達を促す。幼児期に出会う絵本の影響は決して小さくない。大人が先見性や洞察力を持ち、死生観についていかに伝えるか、どのような絵本を選定し、子どもに与えるかが重要となる。

註

註1) 絵本ナビ (<https://www.ehonnavi.net/>) 絵本の試し読みができる参加型の絵本・児童書情報サイトとして2001年に設立され、年間約2,000万人が利用している。「絵本ナビ」がウェブサイトに掲載している絵本数は2022年1月時点で約8.9万作品である。

註2) ピクトブック (<https://pictbook.info/>) 「ピクトブック」は、絵本情報をデジタル化し、情報発信を行うサイトとして2017年に設立された。

註3) 本論文は、第二筆者(脚注2)が2023年くらしき作陽大学子ども教育学部に提出した卒業論文を、第一筆者(脚注1)が再分析した内容にもとづいている。

引用・参考文献

ベッテ ウェステラ ハルメン ファン ストラーテン (絵) 野坂 悦子 (訳) (2002). おじいちゃんわすれないよ 金の星社.

海老根理恵 (2008). 死生観に関する研究と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 193-202.

ハーヴェイJ.H. 和田 実・増田 匡裕 (訳) (2003). 喪失体験とトラウマ: 喪失心理学入門 北大路書房.

細谷亮太 (2015). 子どもの死生観 ラジNITTE 小児科診療, (https://www.radionikkei.jp/uptodate/uptodate_pdf/uptodate-151014.pdf) (2023年6月29日).

池内祐美 (2006). 喪失対象との継続的關係—形見の心的機能の検討を通して 関西大学社会学部紀要,

- 37 (2), 53-68.
- 池内祐美 (2017). 遺品や形見の持つ意味—対象喪失の心理— セミナー年報, 2006, 139-152.
- ユッタ・パウアー 上田真而子 (訳) (2002). いつもだれかが… 徳間書店.
- 金 瑛珠 (2020). 園生活の中での絵本の記憶—就学前の子どもへのインタビュー調査から考える— 東京未来大学研究紀要, 14, 55-62.
- 駒井健太郎 (2005). 死と自殺の概念発達と定義— 生老病死の行動科学, 157-164.
- 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針 (厚生労働省告示第百十七号).
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説.
- E・キューブラー・ロス 川口正吉 (訳) (1981). 死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話— 読売新聞社.
- 松居直 (1973). 絵本とは何か— 日本エディタースクール出版部.
- 水野智美 (2010). 幼児に対する命の教育プログラムの開発—「死」を扱った絵本の読み聞かせを用いて— 研究助成論文集— 明治安田こころの健康財団編, 46, 40-49.
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領 (文部科学省告示第六十二号).
- 仲村照子 (1994). 子どもの死の概念— 発達心理学研究, 5, 161-71.
- 新村 出 (編) (2018). 広辞苑7版, 岩波書店.
- 西川亜結 (2022). 死別体験と死生観に関する研究の現状の課題— 甲南女子大学大学院論集, 20, 33-41.
- 西川由紀子 (2007). 子どもにとっての絵本の絵の役割—絵本「はじめてのおつかい」のおはなしづくりのデータ分析— 立命館大学人文学会, 599, 62-70.
- 西本鶏介 長谷川義史 (絵) (2006). おじいちゃんのごくらくごくらく— 鈴木出版.
- 緒方紀子・西田三十一 (2017). 幼児の死生観の形成に影響する要因に関する文献研究— 聖徳大学研究紀要, 28 (50), 143-149.
- 小此木啓吾 (1981). 対象喪失— 中公新書.
- 小此木啓吾 (1997). 対象喪失とモーニング・ワーク— 松井豊 (編) 悲嘆の心理— サイエンス社, 113-134.
- 尾上明子・中根淳子 (2009). 生と死の絵本をめぐる (1)— 名古屋柳城短期大学研究紀要, 31, 33-42.
- パトリシア・マクマラン クリス・シーバン (絵) なかがわ ちひろ (訳) (2021). おじいちゃんのねがいごと— 光村教育図書.
- 佐野洋子 (1977). 100万回生きたねこ— 講談社.
- 正置友子 (2013). 日本における子どもの絵本の歴史—千年にわたる日本の絵本の歴史— 絵巻物から現代の絵本まで— その1— 平安時代から江戸時代まで— 大阪大学大学院文学研究科哲学講座— メタフュシカ, 44, 81-98.
- 志田久美子・渡邊岸子 (2009). 日本における小児の死生観に関する研究の動向と課題— 新潟大学医学部保健学科紀要, 9(2), 85-92.
- 島蘭 進 (2009). 近代日本人の死生観—その歴史的展望— 国土館哲学学会, 1-14.
- 白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり (2020). 形見の意味と故人との継続する絆 (1)— 社会心理学研究, 36 (2), 49-57.
- 秀 真一郎 (2018). 絵本の読み聞かせにおける考察—感情の有無からくる影響— 吉備国際大学研究紀要, 28, 1-11.
- 曹 文軒・和歌山静子 (絵) 中 由美子 (訳) (2002). よあけまで— 童心社.
- ステイバンヌ ふしみみさを (訳) (2013). ほくのおおじいじ— 岩崎書店.
- 鈴木まもる (2011). いのちのふね— 講談社.
- 鈴木康明 (2022). 日本におけるデス・エデュケーションについて— アジア・文化・歴史研究会, 13, 106-112.
- 徳田克己 (2006). 「ひとの死」から学ぶ「命」の大切さ①— 仏, 6(7), 20-24.

- 植田美津恵・山本直子（2022）. 死生観形成における絵本の役割に関する考察 東京通信大学紀要, 4, 95-112.
- 梅田俊作・梅田佳子（2017）. おじいちゃん ポプラ社.
- やなせたかし（2023）. チリンのすず フレーベル館.